

FLYERS' LITERATUREへの序章

木名瀬信也

DaedalusとIcarusのギリシャ神話、日本では天磐船に乗って降臨された、天孫ニギノミコトの話以来、洋の東西を問わず、人間が鳥のように空を飛びたいという願望は、さまざまな形で、歴史を彩って来た。

Leonardo da Vinciの飛行機のデザイン、天女の羽衣、久米の仙人etc.単なるデザインや空想から一步すすんで、実際に飛翔のための道具の製作と実験、そして失敗と犠牲。空想に合理性が加わった。自然科学の発達が先ず気球の発明をもたらし、次いで「空気よりも重い」航空機を開発することになった。

WilburとOrvilleのWright兄弟が手製の飛行機Flyer号で、初めて空を飛んだのは、1903年12月17日で、場所はNorth Carolina州のKitty Hawkであった。当日最初の飛行は12秒で、36.6メートルであったが、最後の4度目は59秒、258メートルに距離を伸ばした。以後70年間に航空機は驚異的な発達を遂げ、月面着陸やSpace Shuttleの計画が現実化しつつある。

飛行機の改良が進むにつれて、その用途はスポーツから実用へ、さらに軍用へと発展し、再度の世界戦争は航空機の発達に、決定的な役割を果たした。性能の改良はmechanismの革命へと進み、Propeller駆動はJet推進にとって替られるに到った。わずか75年で飛行機がRocket推進を採用し、宇宙旅行が実際に可能になるとは、誰も考えられなかったに違いない。

しかしIcarus以来の人類の夢は、本当に果されたのであろうか。人類の夢が機械力の驚異的な発達に圧倒され、人が空を飛ぶのではなく、

機械が人間を空に打ち上げる現況に、我々はとまどいを見せているのが実状ではなからうか。そして機械の集積であり、pilotというよりもmechanicによって操縦されるJet機は、人が空を飛ぶという夢を運ぶ道具には不相応であり、むしろPropeller機あるいはGliderにこそ、人間と空との関り合いが直接的に保持されていると考えるのである。

Wright兄弟の初飛行後、航空熱はアメリカよりもヨーロッパ、特にフランスに於て盛んになり、Henry Farman (1874-1958) や Louis Blériot (1872-1936) が飛行時間と飛行距離で、着々と実績を重ねていた。草創期に於ける飛行機は、自ら製作者を兼ねる操縦者によって、飛ばされていた。彼等は皆、冒険家であった。第一次世界大戦(1914-1918)は飛行機の改良に拍車をかけ、実用すなわち軍用に耐えることを証明した。戦線の後方を偵察する目的に使用された飛行機は、やがて武器を積んで空中戦をするようになった。飛行の安定性の他に、運動性が求められるようになり、戦闘を主とする軍用機が登場することになった。爆弾を敵陣に投下する目的で、大型の機が必要とされ、爆撃機が出現した。戦争後期には、両軍ともに軍用機の充実に励み、機体・エンジンその他飛行機関連工業が急速且つ長足の進歩をみせた。1918年に大戦が終結するや、軍用機生産の平和利用への転換が求められ、郵便飛行が制度として誕生することになった。

軍用機特に戦闘機(Fighter)はacrobaticな空中戦の花形を生み出し、Manfred von RichthofenやRené P.FonckはFighter Aceの代表として、それぞれ80機・75機の撃墜を誇る国民的英雄であった。しかしわれわれはそこに悲惨な戦争の陰をその裏にはっきりと、見ることができる。戦争はもちろん敵との戦いではあるが、死そのものとの戦いの中にこそ、戦争の真の姿があると考ええる。殺す側にある者も、殺される側に居る者も、双方共に死との戦いである。死を眼前に見すえる極限の場に於ける人間のあり方に、人間本然の姿が現れるとの立場から、いわゆる戦争文学が生

まれてくる。虚飾を取り除いた人間が、本然の姿に帰ったとき、美しい人間愛が発露される時もあるが、醜い獣性が露骨になり、業の深さに戦慄を覚えることもある。戦争を主題とする文学はこの両極の対立を、**dramatic** に構成することにより、作品として成立する。眼前にある死の恐怖が大きければ大きいほど、生の喜びは大きくなる。一瞬にして絶ち切られる愛の深さが、深ければ深いほど、歓喜から絶望への瞬時に起る転換が、悲劇感を強める。戦争は文学に恰好の道具立てを提供するものと、言えるであろう。しかも飛行機はその戦争に花を添え、源平武者の一騎打ちよろしく、空中に輪を画いて撃ち合う戦闘に喝采をおくる。戦争初期の頃は、敵味方の飛行機が空中でハンカチを振って別れたこともあり、騎士道花やかなりし頃を、想起させることもあったに違いないが、そこには苛烈を極めた生と死との葛藤があり、暗い厳しい側面こそ、現実の姿であったことを忘れてはなるまい。当時の飛行機製作者は草創期を乗り越えて、揺籃期に入っていたが、性能の向上や営業などに忙殺され、冒険家の域を越えて、空を飛ぶとはどういうことか、人間が地面を離れたらどうなるのか、などに思いを廻らす余裕はなかった。花やかなPilotの多くは軍人であり、自ら空を飛び廻ることだけが、生き甲斐であった、空を飛ぶことの哲学的な意味などは、むしろ考えない方が軍人らしい軍人と、自他共に認めていた。戦争という大きな渦に巻き込まれて、空を飛ぶこと自体に、生死に関わる問題が内在しているとの認識が一般化していなかった、とも言うことができよう。飛行機製作者もPilotも皆、夢中で飛行機を作り、飛行機に乗った、しかも戦争という大きな国家の要請により、熱狂的努力に拍車がかけられた。第一次大戦はかくて **Erich Maria Remarque : *All Quiet on the Western Front***, **Ernest Hemingway : *A Farewell to Arms*** のような戦争文学の傑作を生み出した。しかし戦争記録は別として、飛行機が中心を占める作品は、戦争文学の中で見出すのが難しいほどである。 **Cecil Lewis : *Sagittarius***

Rising (1936) は数少ない中の一つであろうか。

戦争が終って、飛行機の平和利用は、先ず第一に郵便飛行に向けられた、旅客輸送は未だ一般化せず、遊覧飛行や曲乗飛行によって Pilot は僅かな金額を得るにすぎなかった。このような飛行を *barnstorming* と言うが、状況を見事に写し得て妙である。平和になり、戦争による緊張と死の恐怖から解放された Pilot 達は、飛ぶことの意味や、大地を離れて空中に居るとはどういうことか、を考える余裕をもつことが、できるようになった。

このような背景をもって、*Flyers' Literature* が出現するようになるのであって、戦争文学の一環として Pilot の生き方を捉えた戦記の類は、戦争の泥沼に没し去って、飛行そのものの神秘とそれに対応する Pilot の心を、画くことに主力を置いていない。

昭和54年2月現在、流行語としてまず第一に挙げられるのは、“翔んでる”であろう。飛翔という語もしばしば目にとまる。その意味は、現実を離れて何かに夢中になることであろうか。アメリカの若者の流行語“*flying*”の翻訳であるとも言われている。

1972年の夏、筆者は Oregon 州の田舎町の本屋に立寄った時、*Antoine de Saint-Exupéry* の *The Little Prince* が、うず高く積まれているのを見て、驚いた経験をもっている。当時日本でもよく読まれていた筈であり、内藤濯氏による名訳は1953年の3月に第一刷が発行されている。申すまでもなく日本語訳は「星の王子さま」である。筆者の驚きは発行後30年近く経っている本が、何故このように売れるのか、それとも過去30年間引き続き読まれているのか、であった。原著 *Le Petit Prince* は1943年、その英訳 *The Little Prince* は1945年発行である。訳者は *Katherine Woods*。

Antoine de Saint-Exupéry (1900-1944) は1926年 *Professional Pilot*

として郵便飛行に従事し、西アフリカや南アメリカ航路のPioneerの役割を果たしたが、その経験が*Courrier Sud* (Southern Mail), *Vol de Nuit* (Night Flight) になって結実した。やがて第二次大戦に参加するが、緒戦に敗れたフランスに、痛恨と愛惜とを残して、アメリカへ渡りそこで*Le Petit Prince* 次いで英訳 *The Little Prince* を出版することになった。1944年祖国フランス解放のため、アメリカ軍に加わりアフリカ駐屯の基地から、年令制限を振り切って偵察飛行に飛び立ったままついに帰らなかった。彼は軍人として戦死したのであるが、彼の本質は *novelist, essayist, flyer* そして *poet* であった。*The Little Prince* は童話ではあるが、彼の性格と体験から生れたと考えられる点が、数多く見出される。現在の流行語“翔んでる”の源流を、*The Little Prince* なりと限定するつもりはないが、関係が皆無とは言えないと思う。空は自由で無際限であるとの捉え方が、翔ぶことへの憧れにつながっている。しかし実際に、空は人間にとって際限がなく完全に自由な世界であろうか。地上を離れて高度をとれば、温度・気圧・酸素などが人間の生存に障害の *factor* となって現れてくる。人間は、否鳥でさえも、空中を飛翔し続けることはできない。翔んだものは地上に戻らねばならない。翔ぶことは完全に自由どころか、地上から離れ得ないことを人間に教えることであり、逆説的に言うことができる。流行語としての“翔ぶ”は間もなくシャボン玉のように消えるであろうが、人間がもつ飛翔への志向は、人間の本質的な傾向であり、*Pilot* は体験を通して最も確実な視点を身につける。飛び立てば、必らず地上に舞い戻らねばならない。高く飛翔することの喜びは、*Icarus* のように墜落する恐怖に裏打ちされているのである。ちょうど船頭が板子一枚下は地獄と、身体全体で感じとっているように。しかもその恐怖を越えて、海へあるいは空へ人間が誘われるのは何故であろうか。人間の本来身につけた冒険心か、それとも生命の躍動が高くまた遠いものを希求させるのであろうか。事実人間は、かずつの失敗

や犠牲を乗り越えて、大洋を渡り大空へ挑戦した。人類未踏の極北の地や、山の頂きを目指す人は、今なおあとを絶たない。いろいろな冒険的活動の中で、飛翔が他と絶対に違うことは、空中に静止して、そこに留まることができないということである。

The Little Prince の著者は、サハラ砂漠に不時着をした。サハラ砂漠の神秘的な美しさは、彼を強く惹きつけていた (“In times past I have loved the Sahara” *Wind, Sand and Stars*) しかし「星の王子さま」が現われたのは、砂漠や星の美しさからだけではない。著者は特に触れていないが、不時着が「星の王子さま」の出現に大きな役割を果たしているのである。平坦に見える砂漠も、決して滑走路のような筈はなく、容易に接地し難い場所であるに違いない。着陸地点の選定に血眼になっている時、飛行速度が失速速度に近づいていないか、各計器類の確認を十分しているか、などを同時に平行して留意しなければならない。着陸地点の選定を誤れば、大事故を起すであろう、緊張はその極に達するが、絶対に冷静さを失ってはいけない。見事というよりは幸運にも、着陸に成功すれば、緊張から解放された気の弛みと、一緒に襲って来る疲労感とが、仮眠をとった明け方の冷気の中に、「星の王子さま」を呼び出すのも、決して不思議はないと、思われるのである。飛行機は地上に戻らねばならない、しかも安全に。これが飛翔の帰結である。飛翔に含まれる恐怖は、この帰結の不確実なことに起因する。不確実と不安定が、瀟灑自在な魂の高揚と併存するところに、Flyers' Literature の存在意義が認められると言うこともできよう。

Saint - Exupéry はその著書 *Southern Mail* , *Night Flight* など初期の作品において、この際立った contrast を中心に据え、強い義務感をもって行動する人間を描いている。崇高な魂の高揚を讃える散文詩といえるであろう。Saint - Exupéry は *The Little Prince* において、魂の高揚を純化へと進めて行った。むしろ最初から純粋な魂が、

この童話風な物語の中に、美しい表現となって現れたと言うべきかも知れない。“I am very fond of sunsets”というPrinceに、著者は“..... But on your tiny planet, my little prince, all you need do is move your chair a few steps. You can see the day end and the twilight falling whenever you like...”と言うと、Princeは“One day, I saw the sunset forty four times!”と答えている。飛行機の上から夕陽の沈む頃、地上に眼を落とすと、そこに既に夕闇が広がっている。さらに高くさらに西方へ、飛行機を駆れば、夕陽はなかなか沈まずに、いつまでも飛行機と共にある。この経験がこの文章をもたらしたに相違なく、さらに続けて、“You know—one loves the sunset, when one is so sad...”と言うPrinceの心には人間の孤独感が溢れているように思う。永遠への回帰を思っているからであり、著者を普遍の世界へ導いているからである。

Saint-Exupéryは Flyers' Literatureの先駆者であり且つ創始者であった。flyerとして単に飛行機 Pilotの冒険家で終ったのではなく、詩人の心を行動人の実践で包んだ文学者であった。

流行語「翔んでる」の発生の背景的役割の一つをさらに果したと思われるものに、Richard Bachの *Jonathan Livingston Seagull* がある。「カモメのジョナサン」である。Bachは1936年 Illinois州 Oak Park に生れたが、少年の頃から飛行機に関心を持ち、一時は空軍にも籍を置いたが、その後転々と職業を変えた。飛行機 Pilotと作家との二枚看板を掲げたが *Jonathan* は1970年出版され、1972年突如として売れ行きが急伸、ベストセラーになった。*Jonathan Livingston Seagull* は寓話であると言われている。なるほど十分に寓意が読みとれるのであるが、この storyは Bachが飛行機操縦を習得する過程で、体験したことが中心になっている。寓話を作ろうとしたのではなく、一人前の flyerになるための努力と、飛行への強い関心が、一般の読者に寓意を感じさせたのだと、言うことができる。“But way off alone, out by himself

beyond boat and shore, Jonathan Livingstone Seagull was practicing.” 仲間の seagulls は食べ物に夢中であるが、Jonathan は食べ物は眼中になく、飛ぶこと一途に心掛けている。practicing とは飛行練習のことである。Jonathan は “Then his feathers ruffled, he stalled and fell” 急降下の練習をしたのであるが、“Seagulls, as you know, never falter, never stall. To stall in the air is for them disgrace and it is dishonor.” と stall について説明している。飛行練習はある意味で balance をとり続ける練習である。飛行機の対気速度が、失速速度に達すると失速すなわち stall の状態になる。従って失速にならないよう、つねに教官の注意がとぶのである。“In just six seconds he was moving seventy miles per hour, the speed at which one's wing goes unstable on the upstroke” や “he lost control at high speed.” に飛行機の過速状態を指摘しているのは、stall と同じく overspeed の危険を飛行練習中つねに避けるよう指導された結果である。飛行技術の問題のみならず、Pilot の心の問題も採り上げられている。“Heaven is not a place, and it is not a time. Heaven is not being perfect.” Perfection を求めて努力を続ける Jonathan にとって Heaven とは Perfection であると、言わせている。Jonathan と飛行術習得の過程を結びつけて、人生問題を考えさせる寓話に、仕立てあげられているところに、*Jonathan Livingstone Seagull* の成功があったのであろう。そして *Flyers' Literature* の中で、特にそのユニークさの故に傑作と呼んで、差支えないものとする。

Richard Bach のように流行作家にはならなかったが、*Flyers' Literature* の一翼を担う作家に Anne Morrow Lindbergh (1906 -) リンドバーグ夫人がいる。Charles Lindbergh (1902 - 1974) は 1927 年大西洋無着陸単独飛行に成功して、一躍世界の hero になった flyer であり、その乗機の名前 ‘The Spirit of St. Louis’ と同じ表題の記録文が

1953年刊行され、翌年 Pulitzer Prizeを受賞した。しかし表面的な記録を掘下げて、心の起伏を述べる段になると、Anneの方に軍配を挙げざるを得ない。Anne Morrow Lindberghは少女時代から文学修業に励み、Smith Collegeに在学中、Elizabeth Montagu PrizeとMary Augusta Jordan Prizeを受けている。父親Dwight W. Morrowが米国大使としてMexicoに滞在中、親善飛行で飛来したCharlesと知り合い、1929年結婚した。深窓の令嬢が飛行機野郎と結婚し、1931年夫妻は大圏コースを通して、New YorkからAlaska、千島列島、日本列島、中国へ飛んだ。Anneは科学知識の欠除を克服して、Radio Operator時にはco-pilotとなって夫を助けた。この記録が*North to the Orient*として1935年に発刊された。本来飛行家になるような資質を備えていたわけではないが、夫への協力から前人未踏の飛行に出発した彼女は、苦難や恐怖を味わいながらも見事なルポルタージュを仕上げたのであった。Charlesはpilotとしての資質に恵まれ、沈着にして緻密且つ決断力に富んでいたため、Anneは協力者として無事大任を果たすことができた。しかしAnneにとって初めての経験であったこの飛行は、当然Charlesとは異なる体験を味わう機会となった。そのCONTENTSの第九章にDarkがある。地上に戻る宿命をもっているPilotは暗闇の中でどのようにして飛行機を取扱ったらよいのであろうか。“I remembered now what night was. It was being blind and lost and trapped. It was looking and not seeing — that was night.”暗闇の中を飛ぶ時は、計器飛行によるのが普通であるが、その準備をせず、あるいは、偶然暗黒の中を飛ばねばならぬ場合もあるが、未経験者は非常な恐怖感・極度の緊張を覚えるものである。それは死の恐怖につながっており、不安と焦燥に駆られることがある。高揚された飛翔の願望が、暗黒の死に裏打ちされていることを、素直な心で描写している。この東洋訪問旅行の翌年Lindbergh夫婦を幸福の頂きから奈落の底に突

き落すように、Charles, Jr. が生後20ヶ月で誘拐され殺された。世界的な話題となったこの事件は、さらに Journalism の関心を惹起し、夫妻は報道関係者に追い廻されて、寧日なく、ついに母国を離れる決意を固めるに到った。その翌年1933年は大西洋横断の航空ルート開拓のため、ヨーロッパからアフリカ西岸へ飛び、さらに大西洋上赤道を越えて、南アメリカへ飛んだ。その記録が *Listen! the Wind* として1938年に刊行された。この中では風が主役をつとめているように見受けられる。風がない為に、愛機 'Tingmissartog' は水上から take off できず、さんざんな苦労を重ねた末、第27章の題目にあるように 'Listen! the Wind Is Rising' でやっと目的地へ飛び立つことができた。風の威力と言うよりも、その恩恵をこれほど強く感じたことは、未だ嘗てなかったことであろう。彼女の名作と言われる *Gift from the Sea* (1955) はこのような厳しい体験の後に得られた人生省察のエッセイである。本来 flyer とは言い得ない婦人が、夫唱婦随で経験した飛翔は、それ故に新鮮且つ深刻な影響を与え、彼女の作品にその感動が素直に表現されて、読者に感銘を覚えさせるのである。日常生活に体験し得ないことが、flyer's life の中にあり、それを flyer の体験を通じて解説を試み、鮮明な対照の光を当てることにより、Flyers' Literature がより深く理解されると考えられている。

Flyers' Literature として考えられるものに以下のようなものがあげられる。

- 1) H.E. Bates: *The Stories of Flying Officer 'X'*
- 2) Roald Dahl: *Over to You*